リ・リー語尾命令形の考察

岡野信子

はじめに

リ・リー語尾命令形とは、「起キリ」、「起キリー」、「食ベリ」、「食ベリー」のように、一段活用動詞の命令形語尾が「リ」、「リー」であるものを言う。これは「起きなさい」、「食べなさい」、又は「起きてよ」「食べてよ」相当で、「起キロ」や「食ベレ」とは位相が異なっている。「慫慂形」という名の方が適切かとも思うが、今は「命令形」と単純化して記述を進めていく。

○アンタ　オケリー。〈少女→バスの中で転んだ妹〉
　あんた起きなさいよ。
○チョット　ミセリー。〈少女→少女〉
　ちょっと見せて。

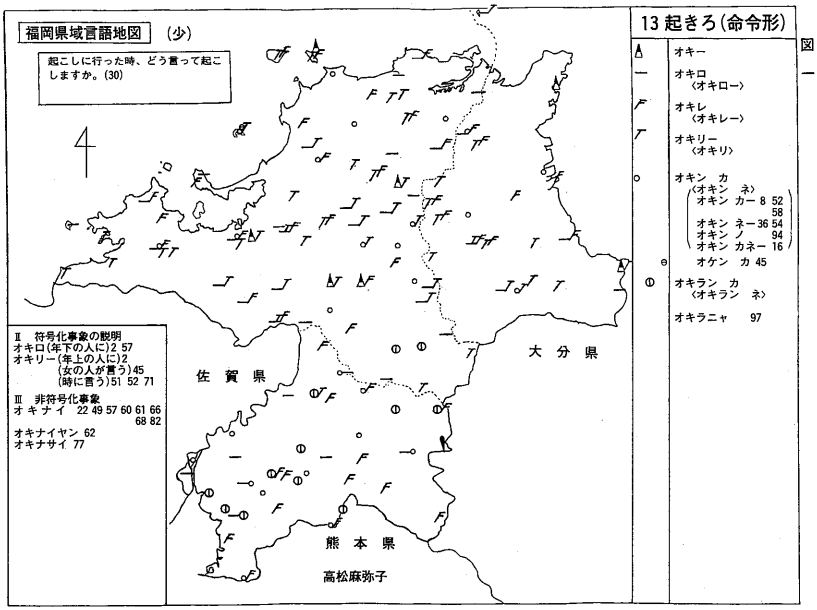
この二文は一九五五年に北九州市若松区で聞いている。私の自然傍受カードに「リ（ー）」語尾命令形の見える最初のものである。もっとも私が耳につくことばを記録しはじめたのがこのころであるから、これ以前には言わなかったとは言いきれないが、一九三〇年代に少女であった私には、「～リ（ー）」を口にした記憶がない。また同様に北九州市域に生まれ育った友人たちも「私どもは言わなかった」と語る。北九州市域で少女たちがリ（ー）語尾命令形を口にしはじめたのは、五十年前ごろであろうか。下関市域のばあいも、ほぼ同じころに少女たちが口にしはじめたようで、四十代の女性たちは「子供のころ〝オキリー　ネ〟、〝タベリー　ネ〟は普通に言っていた」と語る。

自身が口にしたことのない、この新しい命令形が、福岡県域、また山口県西南辺でしだいに栄えていることは、これまで何度か報告し、地図化も行なってきた。今回は対象域を広げてその分布状況、使用状況、またこれの待遇品位を見、成立事情についても考えてみたい。なお、リ（ー）語尾命令形の一展開であるリンナ禁止形についてもこの稿で報告しておきたい。

一　分布状況

まず私自身の調査を報告し、その後に諸御論考、また言語地図上の分布状況を記していく。

1　九州域内の分布状況



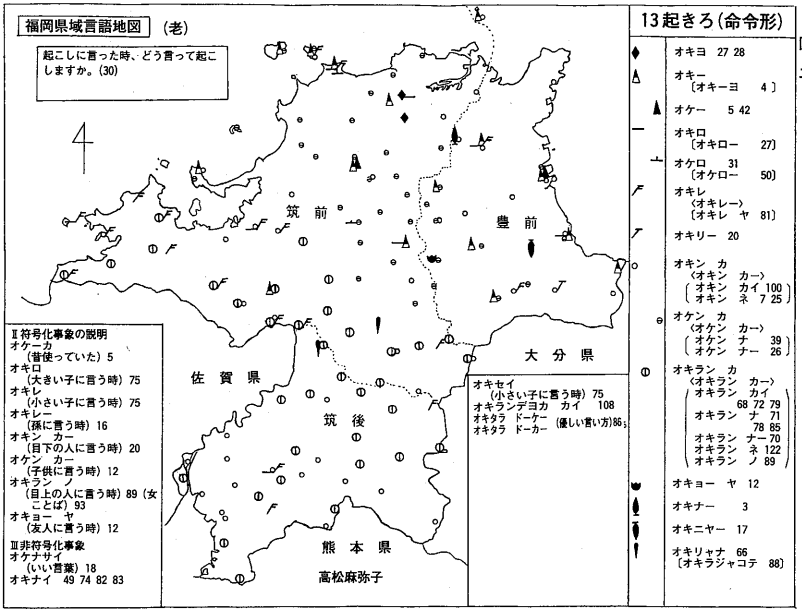
図一

リ（ー）語尾命令形を私がはじめて報告したのは、『研究紀要』第12集（福岡県立若松高等学校郷土研究会、一九六五年）の、「北九州市若松区島郷生活語における動詞の生態」においてである。これは一九五五年ごろからの資料を整理して記述したものであるが、少女たちの言う「ミセリー」（お見せよ）、「オケリー」（起きなさい）を、「マチ」（お待ちよ）や「ツギー」（湯呑みにお茶をお入れよ）とともに記している。すなわち一段動詞のリ（ー）語尾命令形が五段動詞のΩ語尾命令形とともにある。ほかに「ミテン　ミテン」（ほらご覧よ）〈少女→調査者〉や、「イテ　ミヨ」（行ってご覧）〈老男→幼男〉があり、男性一般の言う「起キレ」、「起キー」もあって、命令形は多様であった。

この後、『九州方言の基礎的研究』（九州方言学会、風間書房、一九六九年）の「福岡県」の章にも、私は「近時、東北域の少女の間にはヤリー・考エリー式命令表現が盛んである」と書いている。また『講座方言学9　九州地方の方言』（飯豊毅一ほか編、国書刊行会、一九八三年）には次のように記している。

豊前・筑前では「ハヨ　イキ（早くお行き）」「カシテ　ヤリー（貸して頂戴）」のような連用形命令表現法が、若い女性の間に栄えている。「見リ」「出リ」も連用形命令とされよう。「起キリ」「受ケリ」はリ語尾命令法と呼ぶべきものになっている。

この時、「見リ」「出リ」を連用形命令としたのは、語幹が一拍の一段動詞はラ行五段化しているためである。語幹が、二拍以上の一段動詞の五段化は不安定であるので、「連用形十リ」命令形と考えた。



図二

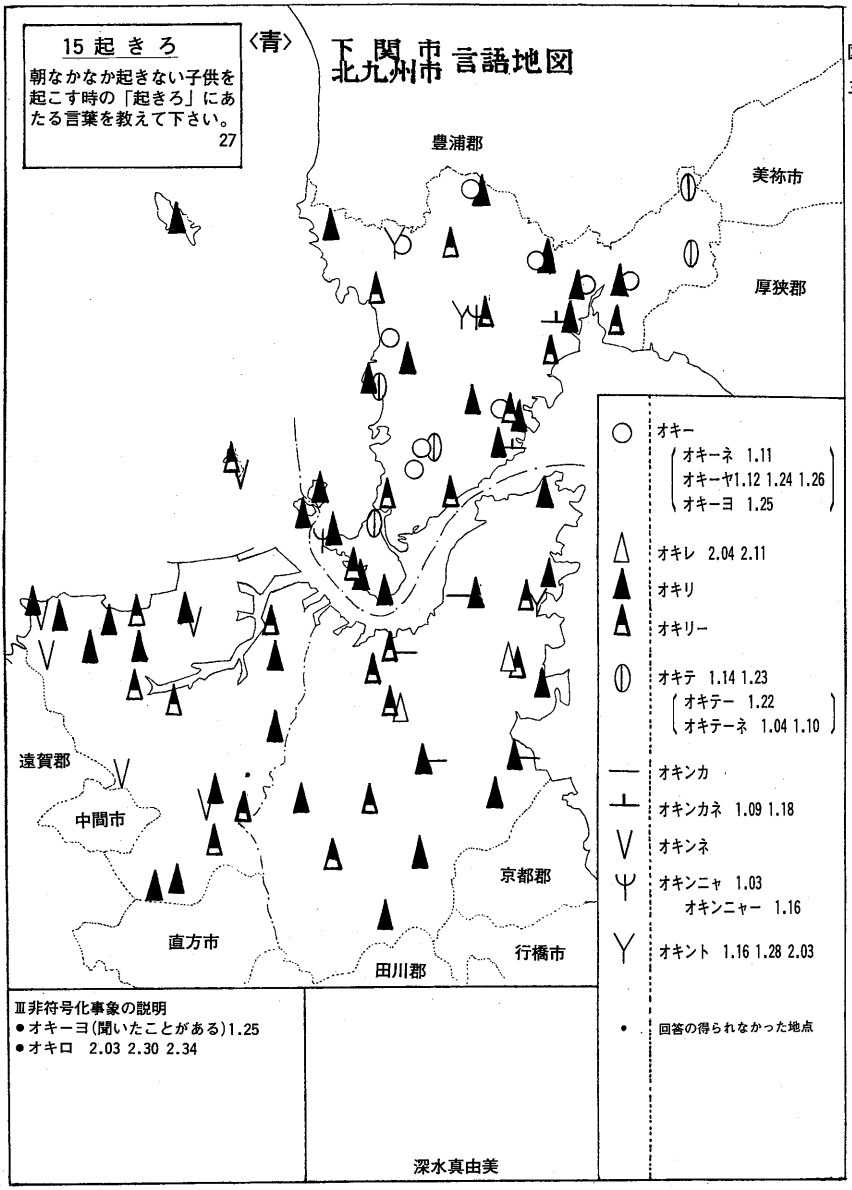
これに続いて飯塚市八木山の文法・表現法を記述した時も、青少年ことに女子が、五段動詞とサ変・カ変動詞では連用形で、一段動詞では連用形に「リ」語尾を添えた形で命令することが多くなっている、ただし老女はこれを言わないと述べている。(「方言の文法・表現法の記述」『新しい方言研究』、至文堂、一九八五年)

リ(ー)語尾命令形、また五段動詞のC語尾命令形は、学生との研究会やゼミの調査項目としてもたびたび採り上げ、地図化もしてきた。

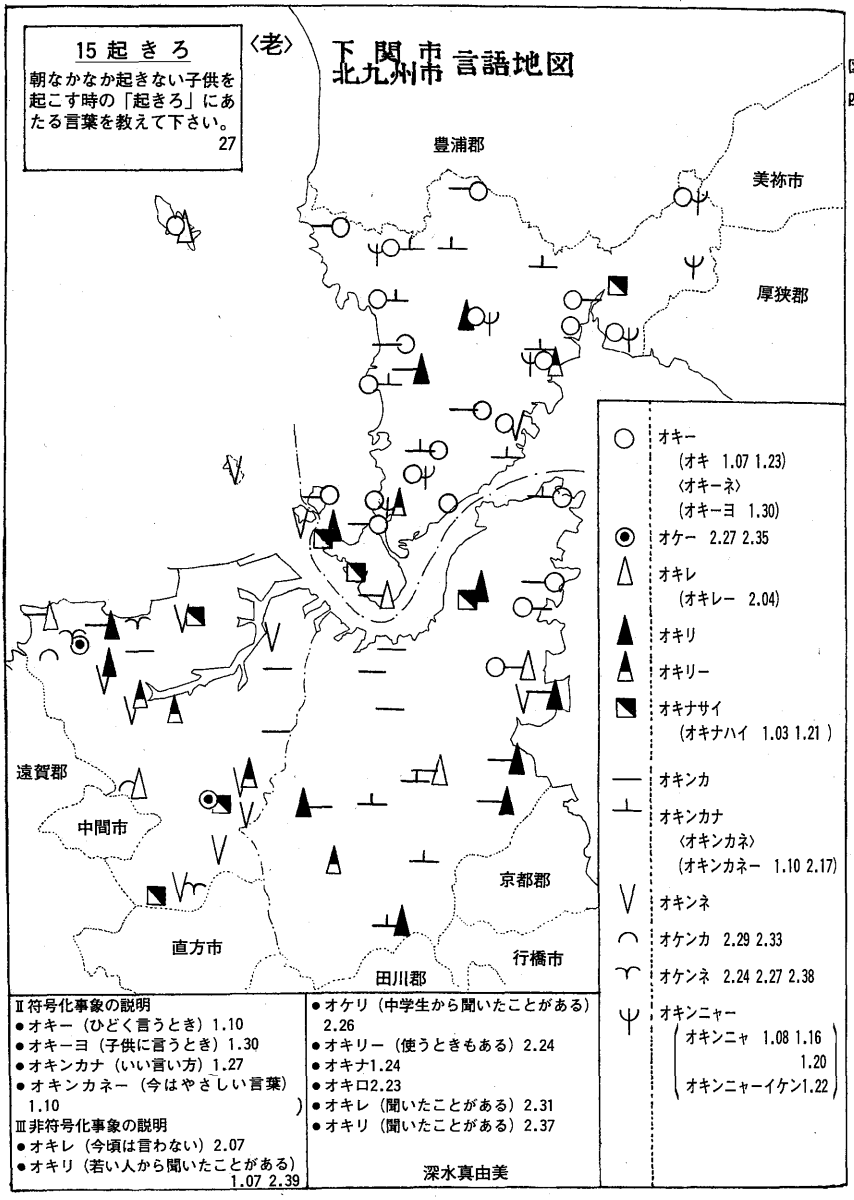
『山口福岡両県接境地域言語地図集』(岡野信子編、梅光女学院大学方言研究ゼミナール、一九七六年)中には「食べろ」と「行け」の図がある。今、福岡県がわの状況だけをみると、少女の場合は、京都郡・北九州市・遠賀郡の海岸一八地点と島の二地点の計二十地点の全地点に、「タベリー」、「タベリ」と「イキー」が分布している。一方、高年女性では、「タベリ(ー)」は五地点に、「イキ」は二地にあって、「オイキー ナ」が一地にある。

一九八五年には、動詞の活用形調査を中学生を対象に行なった。福岡県がわは北九州市の九校と直方市・嘉穂郡桂川町の各一校の中学二年生一学級の調査である。命令形調査は「見る」「出る」「起きる」「食べる」「借りる」「借る」について行なったが、どの語についても、男女生徒がリ(ー)語尾形を答えている。ただし、どの中学校でもレ語尾命令形との併存で得られていて、女子ではリ(ー)語尾命令形の比率がきわめて高いが、男子では逆にレ語尾命令形の比率が高い。「起キー」「食ベー」などはきわめてまれに一、二の学校でわずかに聞いたばかりである。この詳細は『梅光方言研究』第

図三


15 起きろ
朝なかなか起きない子供を起こす時の「起きろ」にあたる言葉を教えて下さい。
27
〈青〉
下関市
北九州市 言語地図
豊浦郡
美祢市
厚狭郡
遠賀郡
中間市
直方市
田川郡
京都郡
行橋市
オキー
オキーネ 1.11
オキーヤ1.12 1.24 1.26
オキーヨ 1.25
オキレ 2.04 2.11
オキリ
オキリー
オキテ 1.14 1.23
オキテー 1.22
オキテーネ 1.04 1.10
オキンカ
オキンカネ 1.09 1.18
オキンネ
オキンニャ 1.03
オキンニャー 1.16
オキント 1.16 1.28 2.03
回答の得られなかった地点
Ⅲ非符号化事象の説明
●オキーヨ(聞いたことがある)1.25
●オキロ 2.03 2.30 2.34
深水真由美

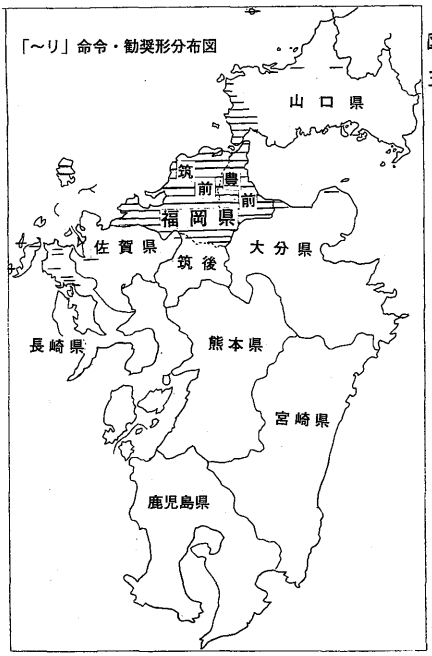
図四


15 起きろ
朝なかなか起きない子供を起こす時の「起きろ」にあたる言葉を教えて下さい。
27
〈老〉
下関市
北九州市
言語地図
豊浦郡
美祢市
厚狭郡
遠賀郡
中間市
京都郡
直方市
田川郡
行橋市
オキー
(オキ 1.07 1.23)
〈オキーネ〉
(オキーヨ 1.30)
オケー 2.27 2.35
オキレ
(オキレー 2.04)
オキリ
オキリー
オキナサイ
(オキナハイ 1.03 1.21)
オキンカ
オキンカナ
〈オキンカネ〉
(オキンカネー 1.10 2.17)
オキンネ
オケンカ 2.29 2.33
オケンネ 2.24 2.27 2.38
オキンニャー
(オキンニャ 1.08 1.16 1.20
オキンニャーイケン1.22)
Ⅱ符号化事象の説明
●オキー（ひどく言うとき）1.10
●オキーヨ（子供に言うとき）1.30
●オキンカナ（いい言い方）1.27
●オキンカネー（今はやさしい言葉）1.10
Ⅲ非符号化事象の説明
●オキレ（今頃は言わない）2.07
●オキリ（若い人から聞いたことがある）1.07 2.39
●オケリ（中学生から聞いたことがある）2.26
●オキリー（使うときもある）2.24
●オキナ1.24
●オキロ2.23
●オキレ（聞いたことがある）2.31
●オキリ（聞いたことがある）2.37
深水真由美

五号（梅光女学院大学方言研究会・同短期大学部方言研究会、一九八六年）に記している。

また一九八六年の福岡県域調査では、県下の一二三地点で、高年男性と中学生男子に「起きろ」と「せよ」を聞いている。「起きろ」を地図化した図一と図二は『福岡県域言語地図』（梅光女学院大学方言研究会、一九八七年）中の図である。図一（少年層図）では豊前と筑前の多くの地点で「オキリ（ー）」が得られている。ただし多くは「オキレ（ー）」との併存であり、「オキー」や「オキロ」との併存もいくらかある。

日常、男子中学生どうしのことばでは、「オキリ（ー）」をあまり耳にしないのに、この調査でこのように多く答えられているのは、



図五

調査者が女子大生であるためであろう。つまりお姉さん格の調査者に対して、対女性語をも答えたのであろう。ただし筑後域では「オキリ」は三井郡北野町の一地で、「オキラン　カ」との併存で聞けただけである。高年男性では図二に見えているように豊前市岩屋の一地で「オキリー」を聞いただけで、これも「オキン　カ」との併存である。

一方「する」の命令形では「シー」と「シリー」が、少年層図上には豊前・筑前にあるが「オキリー」ほど多く得られてはいない。また高年層図上には筑前の四地に「シー」、二地に「シリー」があって、これは「オキリー」よりは多く聞かれている。「セロ」「センカ」「シェン　カ」の優勢な筑後域には「シー」、「シリー」はない。

この後、一九八九年に行なった、高年男性と男子中学生を話者とした「下関市・北九州市言語調査」では「起きろ」を聞いている。北九州市の三十五地点のうち、男子中学生では、十二地点で「オキリ」が「オキレ」「オキン　カ」との併存で得られた。高年層では若松区小竹の一地で「オケリ」を聞いたばかりである。

つづいて一九九〇年には、同域で女子高校生と高年女性を対象者として方言調査を行なった。北九州市域の調査地点は三十九地点、命令形は「起きろ」「食べろ」「行け」を聞いている。図三と図四は「起きろ」の青年層図と高年層図である。分布状況は図上に見えているとおりで、昨年度の男性の状況にくらべると青年層・高年層ともに、リ（ー）語尾を言うことははるかに優勢である。なお、ここに図はあげていないが高年層でも青年層でも、「タベリ（ー）」は「オキリ（ー）」よりさらに優勢であった。また五段動詞のC命令形「イ

キ（ー）」は女子高校生では全地点で得られ、高年層でもきわめて優勢であった。

このような調査に続けて一九九一年には、梅光女学院大学の学生にアンケート調査を行なった。調査語は、1食べる　2起きる　3借りる（借る）　4出る　5見る　6する　7来る　である。これらの語の命令形として想定される語形を並べ、その中から自己の使用語形を選ぶのであるが、この中に自身の使用語形のない場合は、使用語形を具体的に書いてもらった。

回答者は二六六名、大部分は十八歳か十九歳で、二十歳、二十一歳の学生は約三十名である。学生たちがその言語形成期を過ごした地は北海道から鹿児島県までさまざまであるが、山口県と福岡県が多い。なお、沖縄県出身の学生はリ語尾を答えているが、これは別に考えるべきものと判断して、今回は取りあげていない。

図五は、このような調査によって得られたリ（ー）命令形の分布域の概略図である。

福岡県域出身者でアンケートに答えた学生は六十八名であったが、リ（ー）語尾命令形を言うと答えた者はこれまでの調査の結果と同様に豊前・筑前出身者である。ただし県内豊前域の分布は県境を越えて大分県中津市・東国東郡国見町まで広がっている。一方、筑前域分布に続いて筑後の小郡市、佐賀県の鳥栖市（肥前）でもこれを言うと答えている。筑後域の久留米市、浮羽郡の学生たちの中には、リ（ー）語尾を言う者、言わない者がまじっているが、言うと答えた学生の通学した高校の所在地は朝倉郡あるいは小郡市であった。

地図五に見えているように、福岡県下の分布域を離れて、佐賀県西北域の伊万里から長崎県北部にかけてもう一つの分布域がある。その地点は次のようであった。

佐賀県伊万里市・長崎県松浦市・佐世保市・北松浦郡佐々・同郡生月（イキツキ）島・同郡小値賀（オジカ）島・壱岐島

これらの地点の回答者はそれぞれ三名あるいは一名である。佐世保市のうちの早岐（ハイキ）町、また北松浦郡小値賀のリ（ー）命令形は長崎大学教授愛宕八郎康隆氏の教示されたものである。また壱岐島でリ（ー）語尾命令形を言うことは、卒業生平川典子姉（壱岐高校教諭）の教示を受けた。なお、早岐町では、また福岡県の豊前域の学生たちにも、「する」の命令形を「シリ（ー）」と答えた者がいた。北九州市域の学生たちの中には、これを「変な言い方」と批評する者もいる。ただし一九八六年の福岡県域の男性調査でも「シリー」を聞いていることはすでに述べているとおりである。

これらのほかの九州域内の回答者の答えた命令形の中にリ（ー）語尾命令形は見えない。その地点は次のとおりである。

福岡県　八女市・八女郡の諸地・三潴郡三潴町・山門郡山川町・大牟田市・佐賀県　佐賀市・小城郡小城町・武雄市・唐津市・長崎県　諫早市・南高来郡南串山・長崎市・西彼杵郡長与・南松浦郡有川・奈良尾（五島列島中通島）・下県郡美津島町（対馬）・熊本県　熊本市・八代郡千丁町・水俣市・鹿児島県　大口市・鹿児島市・宮崎県　都城市・宮崎市・延岡市・大分県　津久見市・玖珠郡玖珠町・別府市

今回の調査で、一段動詞のリ（ー）語尾命令形を言う地域と言わ

ない地域とはこのように分れたが、リ（ー）語尾命令形を言う地域には「シー」（しなさい）、「キー」（来なさい）があり、リ（ー）命令形を言わない地域にはこれらもない。一段動詞のリ（ー）命令形を言う地域の中には「シリー」（しなさい）を言う所もあることはすでに述べた。

ところで豊前域・筑前域の分布と肥前北部沿岸島嶼の分布はどのようにかかわるのであろうか。今回の学生の報告によれば両域の分布は離れているが、海岸線を綿密に調査していけば、この分布はあるいはつながるかもしれない。また離れて分布することもあり得ることは、たとえば『瀬戸内海言語図巻　上巻』（藤原与一著、東京大学出版会、一九七四年）の44「見らん・見れ」、55「行き」（命令表現法）の図上に明らかである。

図上の九州は周防灘沿岸で、44「見らん・見れ」では、少年層図には福岡県京都郡の一地に「ミリ」があり、老年層図には見えない。また55「行き」では、少年層図上には大分県下の沿岸四地と姫島、福岡県下は調査全地点の七地に「イキ（ー）」が見えている。老年層図上には見えない。

福岡県域の「タベリ（ー）」については、陣内正敬氏が、県下の八高校と佐賀市の一高校の男女計四一二名の調査結果を『都市化と方言―福岡市及びその近郊地域―』（一九八五年）で報告された。また「北部九州の新方言」（『九州方言の史的研究』奥村三雄、桜楓社、一九八九年）中でもこの資料によって論じておられる。氏の調査では、筑後域の久留米市・柳川市・大牟田市・また肥前の佐賀市でも低い比率ながらリ（ー）語尾命令形を言っており、全般に男女差はなかった。

このような状況から、筑後のリ（ー）語尾命令形は筑前あるいは豊前から伝わったものと考える点では陣内氏も私も同じであるが、筑後域の分布状況、またリ（ー）語尾域における男女差の有無がいくらか異なる。これはこの命令形が目下広がりつつあることを証明していよう。活発に動いている事象の調査では、対象者が異なり、調査語が異なる時は、いくらか違った結果が出ることもあり得る。

つぎに九州の外の状況を見ていこう。

2　九州以外の地域の分布状況

九州以外では、これまでおもに長門域のリ語尾命令に注目してきたが、これを命令形とすることはためらわれて、「山口県日本海沿岸島嶼の方言の待遇表現法」（『日本文学研究』第一二号、梅光女学院大学日本文学会、一九七六年）では、〝リ語尾勧奨表現〟としている。これには豊浦郡の黒井で聞いた「タベリー　ネ。オイシーヨ」〈少女→少女〉をあげた後、次のように記している。

少女たちの一段活用動詞勧奨表現では、「オキー　ネ」・「タベー　ネ」・「デー　ネ」よりも、「オキリー　ネ」・「タベリー　ネ」・「デリー　ネ」を用いるほうが、優勢になりつつある。文末詞を添えず、「タベリー」だけであることも多い。

（中略）〝勧奨表現における「リ」音尾好み〟とでも言ったものが感じられる。その勢力はサ変動詞にも及んで、「シリー　ネ」（なさいよ）とも言う。見島の小学生からは「セリー　ヤ」を聞いた。

このようなリ語尾勧奨表現は五段活用動詞の連用形勧奨表現（Ci

勧奨表現）とともにある、すなわち「チョット　アガリー　ネ」（ちょっとお上がりよ）〈少女→少女〉、「ハヨ　イキー」、「アッチー　アガリ」などと言っていることを記している。その分布状況をくわしく記してはいないが、五段動詞の連用形勧奨法は、長門全域で全年層の女性がこれを言っていた。なお、この稿には記していないが、下関市六連島では一九七五年に、高年女性が娘婿に「トーチャン　オシエテ　アゲリ」（お父さん、先生に教えてあげなさいよ）と言ったのを聞いている。

九州域の状況を述べる時にあげているが、この同じ年の『山口福岡両県接境地域言語地図集』には「行け」と「食べろ」の図がある。山口県がわの調査地点は厚狭郡・下関市・豊浦郡の海岸と島の二三地点、話者は九州と同じで女性である。「行け」の少年層図上には、「イキー　ネ」、「イキー」、「イキ」のどれかが全地点にあり、これらが併存している地点もある。高年層図では「オイキー　ナ」がもっとも優勢で、「オイキ」、「オイキー」もある。「イキー　ヤ」は厚狭郡海岸の一地に「オイキー　ナ」との併存で見えているだけである。また「食べろ」の少年層図上には「タベリー」あるいは「タベリー　ネ」が全地点にあり、「タベリ」も九州に近い二地に見える。一方、高年層図上に「タベリー　ナ」または「タベリー」、「タベリ」が見えるのは、彦島・六連島・蓋井島だけである。この状況を対岸の福岡県がわと比較してみると、少年層図上の状況はともに全地点にリ（ー）語尾があって変らない。高年層図の場合、分布地点数にさしたる違いはないが、福岡県がわの方が分布域が広い。

一九八五年の、中学生を対象とした動詞の活用形調査は、山口県がわは宇部市の一校と下関市の四校である。リ（ー）語尾を言う比率は北九州市域より低く、ことに宇部市の男子中学生は調査語五語の中で、「出リ」を二人が報告しただけである。男女差が見えることは北九州市域と同様である。

一九八九年調査の下関がわの調査地点は三十五地点であるが、この中の五地点で中学生男子が、「オキリ」または「オキリー　ネ」、「オキリー　ヤ」を「オキレ」との併存で答えている。リ語尾命令は北九州市域より劣勢である。高年層図上にリ語尾事象はまったく見えない。

つづいて行なった一九九〇年の、女性を対象とした「起きろ」の調査結果は図三と図四に見るとおりである。リ（ー）語尾命令形の、高年者と女子高校生の差は北九州市の場合より著しい。「起キリ（ー）」よりは「食べリ（ー）」が優勢であることは北九州市の場合と同様であった。また「行キ（ー）」は北九州市域より優勢で、高年層図上にも彦島・六連島を除く全地点に分布が見えている。

リ（ー）語尾命令形の下関がわのこのような分布状況は、これが北九州市がわから伝播したことを見せているとも見えるが、独自に成立している可能性も十分あって断じがたい。五段動詞の連用形命令は下関市域に早く伝わってやがて北九州市域に及んだ状況は、『瀬戸内海言語図巻』の55「行き」の図上に見えている。

一九九一年のアンケート調査の項目・方法・対象者などについては九州分布を見る時にすでに述べている。九州以外でリ（ー）語尾命令形を言うことの盛んなのは下関市と豊浦郡であった。豊浦郡に続く大津郡の日置町、さらに北部の萩市の学生も「来る」の命令形

以外はすべてリー語尾形を報告している。「タベリーッ　チャ」（お食べってば）、「シリー　ヤ」（なさいよ）のように文末詞を添えて言っている。萩市見島の状況は今回の調査ではわからないが、沖合はるかのこの島で、少女たちが「セリー　ヤ」（なさいよ）を言っていたことはすでに述べている。

阿武郡旭村・阿東町・山口市・小野田市・宇部市

これらの地点では、複数の回答者の中に、「食ベリー　ネ」、「出リー　ネ」は言うが、「起キリー」「借リリー」「見リー」は言わないと答えた学生もいる。また「食ベリー　ネ」も言うが「食ベサン」（食べなさい）がおもだという報告もあった。海添いの長門西辺域より、リ（ー）語尾はいくらか弱勢である。もっともC語尾の「シー」、「キー」（来なさい）はどの地点でも優勢である。

光市・大島郡橘町（周防大島）

県東部でありながらこの二地はリ（ー）語尾命令形を言い「シー」、「キー」も言う。橘町の学生は「食ベンサイ」「シンサイ」などの「～ナサイ」ことばと併用すると報告している。

リ（ー）語尾命令形を言うと報告されたのは以上で、以下は言わないと報告のあった地点である。

山口県　阿武郡阿東町徳佐・美祢市・防府市・熊毛郡田布施町・平生町・玖珂郡錦町・島根県　邇摩郡仁摩町・平田市・広島県　山県郡戸河内町・豊田郡瀬戸田町（生口島）・安芸津町・賀茂郡黒瀬町・三次市・甲奴郡上下町・尾道市・福山市・岡山県　井原市・徳島県　徳島市・兵庫県　姫路市・美方郡温泉町・新潟県　新潟市・静岡県　静岡市・千葉県　船橋市・北海道　札幌市・札幌郡の諸地・恵庭市・千歳市・河西郡芽室町・空知郡南幌町

これらの諸地の中の静岡県以東の地点、また日本海がわの新潟市、兵庫県美方郡温泉町と島根県の二地には「シー」、「キー」もない。いわゆる連用形命令を言わないようである。

私の調査は以上であるが、本土域のリ語尾命令形は、諸氏の著書・論文・言語地図の上に以下のように見えている。

『瀬戸内海言語図巻』の話者は女性であるが、44「行き」の老年層図上には「イキ」又は「イキー」が近畿沿岸と淡路島に優勢で、中国・四国には主として島々に分布が見える。少年層図上には「イキー」がいちだんと優勢で、山口県下には沿岸域一帯にも分布が広がっている。これにくらべると44「見れ」に「ミリ」「ミリー」を答えているのはずっと少ない。老年層図上には大阪府泉大津市、淡路島のそれぞれ一地に見えるだけである。少年層図上にはいくらかふえて、淡路島、愛媛県大三島、山口県の周防大島に点々と見えている。また57「するな」の少年層図上には「ヤメリ」「ヤメリー」が、これも淡路島・大三島・周防大島に、わずかながら分布が見えている。

『方言敬語法の研究』（藤原与一、春陽堂、一九七八年）には「動詞連用形を用いる尊敬表現法」の章があり、これの本場は近畿・四国のようだとある。ただし長野県北部、伊豆諸島の三宅島、群馬県前橋市北郊の一村でこの言いかたを得ていることも記されている。

「食ベリ」、「オリリ」（下りなさい）など、一段動詞のリ語尾命令形を言う地域、地点としては、香川県西部、大阪府下和泉地方、

前橋市東北郊の一村があがっており、長野県下については「北信に〝見リ〟〝タベリ〟があるという」とある。

群馬県下の高崎市で女性や子供が「書キー」「取リー」「受ケリー」「シリー」（しなさい）を言うことは、『群馬県の方言』（杉村孝夫、『講座方言学』5、一九八四年）に見えている。

『方言敬語法の研究』には、愛知県下の三河地域では「見リン」、「寝リン」のように「ン」を添えて言うことも記されているが、これは「方言敬語法体系の方言地理学的考察―愛知県地方域方言のばあい」（江端義夫、『国文学攷』第九十号、一九八一年）にも記述され、「タベリン」（おあがりなさい）が老年層よりは少年層で優勢な状況の見えている地図もある。

「尾張知多半島の一小方言の敬語法」（江端義夫、『方言研究叢書』第八巻、藤原与一編修、三弥井書店、一九七八年）は知多市南粕谷の方言を記述しているが、これに「タベリ　ノ」（お食べなさいな）〈五十代女→五十代女〉があがっている。

『方言文法全国地図』2（国立国語研究所、一九九一年）は動詞活用形の地図で、調査は高年男性を話者として、一九七九～八一年の間に行なわれた。リ語尾命令形は位相の異なるものであるから、この図上にはまず現れないのであるが、以下のように見えている。

姫路市的形町には、85「起きろ」に「オキレ」「オキ」と併存で「オキリ」がある。また87「開けろ」に「アケリ」と「アケンカイ」、90「来い」に「キー」と「コイ」がある。

東京都（大島支庁）利島村のばあいはいずれも単存で、85起キリ、86見リ、87開ケリ、88任カセリ、89蹴り、91為り　である。ただし「来る」の命令形は「コー」である。

愛知県渥美郡渥美町江比間では、85にオキリンがオキン・オキレヨ・オキョーヨと併存、86にミリンとミョー、87にアケリンとアキョーヨ、89にケリンとケレ、90に来ンとコイ、91にセリンとショーヨがある。

なお、一段動詞ではレ語尾命令形が一般である北海道と新潟の状況を見るため、北海道は小野米一氏、新潟市は大橋勝男氏に調査の世話を依頼した。北海道は城野光一教諭のお世話で札幌郡広島町の北海道北広島高等学校一年生男女四十六名の回答をいただくことができた。また新潟は三村孝志教諭のお世話で新潟市立上山中学校二年生男女三十六名の回答をいただくことができた。梅光女学院大学での調査と同じアンケートに対して、一段動詞のリ語尾命令形も五段動詞のCi語尾命令形もともになかった。

これまでに見得ているリ（ー）語尾命令形の分布状況は以上である。

二　待遇品位

諸氏の論述と自身の調査とを合わせ考える時、リ（ー）語尾命令形の待遇品位には地域差がありそうに思える。福岡県下・山口県下の状況にかぎっていえば、これは日常の気楽な会話の中で、主として女性、ことに若い女性が同年以下の人々に言うことばである。たとえ年下であっても、母親が子供にきちんと言う時には「起キナサイ」であって「起キリー」ではない。

年長者には言えない、改まった場席では言わないという使用状況

からすれば、敬語とは言いにくい。ただし、「食ベロ」や「食ベレ」にくらべれば優しいことばで、親愛語と言うのがふさわしい。この命令形の優しさは、リ音がロ音やレ音よりは優しい響きであること、また「タベリ」、「タベリー」のような上昇調、「タベリー」のような持ちかけ調子によってもたらされてもいよう。山口県下では、「タベリー　ネ」や「タベリー　ヤ」のように文末詞を添えて優しさをさらに添えている。「タベリッ　チャ」（食べなさいってば）はややきついが可愛い口調である。

ところでこの命令形に対する評価は今のところ肯定も否定もあって定まらない。肯定する者は「かわいい」、「優しい」、「簡潔でよい」と言い、否定する者は、「あらわにすぎる」、「きつい」、「きれいでない」などと言う。これを言わない地域から来ている学生は、使いなれた「タベサン」（山口県）、「タベン　ネ」（筑後）、「タベナッセ」（熊本市）、「オタベー」、「タベン」（松山）などと比較して、「乱暴だ」、「はすっぱな感じ」などとかなりきびしい。これが東京から入ってきた語形でないことが、自由な否定をも許しているようである。

新しい形は肯否両論を受けながら、あるものは生きのび根付き、あるものは消えてゆくのであろう。リ（ー）語尾命令形は次第に根付く状況を言語地図上にも見せている。

三　成立と転開

一段動詞のリ語尾命令形の成立に関しては、これが五段動詞・サ変動詞のC:語尾命令形を言う地域・地点にあることに注目している。ラ行五段動詞の中で語幹末がi・eの語の命令形「切リ」、「蹴リ」、「入リ」、「走リ」、「帰リ」、「捻リ」に類推すれば、「見リ」、「出リ」、「寝リ」、「起キリ」、「食ベリ」などを言うのは不自然ではない。したがってリ語尾命令形は五段動詞のC:命令形を言う所ならばどこで言っても不思議はないはずである。現に防府市―ここはC:命令形は言うがリ語尾命令形は言わない―の学生は、なにかのはずみに「寝リー」と言って大笑いしたとコメントを寄せている。そのようなリ語尾命令形が、たとえば『瀬戸内海言語図巻　上巻』図上では、大阪府の沿岸一地以外は島々に点々と見えているだけである。また私の調査では近畿以西でまとまった分布域を見せるのは、九州北部と山口県西南辺である。これはリ語尾が空間的には中央に比較的遠い所、心理的には言語上の規範や規制の比較的ゆるやかな所に生まれ栄えているということであろうか。

ところで九州の北部域では、一段動詞の男性語の命令形語尾はレである。女性が口にするリ語尾命令形はレ音よりは聞こえの優しいリ音を言ったとも考えられる。学生たちのコメントにもこのような理解を記したものもあった。下関市や豊浦郡も中高年男性は「起キー」、「食ベー」であるが、青・少年層では「オキレ」、「タベレ」が優勢である。他地の状況は明らかでないが、『方言文法全国地図2』の兵庫県一地のリ語尾、愛知県一地のリ語尾もレ語尾と併存している。ただし一段動詞のレ語尾命令形は言っても、五段動詞のC:命令形を言わない北海道や新潟市には、リ語尾命令形は創出されていない。

ところで先にあげた「尾張知多半島の一小方言の敬語法」には、「タベリ」とともに「入リリン」、「起キリタ」も見えていて、江端

氏は「上述の連用形での尊敬表現法は〝オ……アル〟の一派形と考えることができようか」と言われる。リ語尾命令形の成立事情は単純ではないようである。

さてリ語尾命令形は一段動詞に言うばかりでなく、サ変動詞を「シリー」、「セリー」と言う所も点々とある。これを言わない地域の学生が、まねたつもりで、五段動詞の連用形にも「リー」を添えて「読ミリー」と言うのも聞いたことがある。

また下関市と豊浦郡では、「起キリンナ」、「食ベリンナ」などの禁止形も聞く。一方に「行キンナ」、「読ミンナ」もある。これらを引き出したのは「シンナ」(するな)であろう。その「シンナ」は「スンナ」から出ている。「スンナ」は「するな」の音変化事象であるが、少女たちは命令の「シ」に禁止の「ンナ」を添えたように理解したのであろう。その理解、解釈が「起キリンナ」、「食ベリンナ」などを生んだと思われる。福岡県域では京都郡豊津町の学生から聞いた以外はこれを聞いていない。

おわりに

リ語尾命令形は、親愛の情を託すにふさわしい命令形を求めて創出された。いったいに、命令形は活用表の上に見ることはできても、女性がこれを単純に口にすることはまれで、たとえば「オタベーネ」〈長門域〉のように尊敬の接頭辞を冠して、また「タベナハイ」〈豊前域〉のように尊敬の助動詞を添えて用いた。「タベン　ネ」のような打ち消し問いかけ形式、あるいは「タベテ」のような懇願形式を用いるなど、命令表現にはさまざまに心をくだいてきている。五段動詞のC語尾命令形、一段動詞のリ(ー)語尾命令形はそのような状況の中に創出された。それは待遇表現の簡素化という一般的な傾向と歩みを一つにするものである。

山口県下の豊関地区、また九州北部の状況をリ(ー)語尾命令形の使用に限って言えば、若年女性から中高年層に使用者層を広げている。年輩の者から若い人々へと伝えられていく一般的な状況とは逆の方向であるのに注目させられる。また近年は若年男性にも用いられている。おおむね対女性語として用いられているが、今は男性間でも用いられていると報告した学生もいた。男性語の女性語化の一端であろうか。

リ語尾命令形はまた、命令形の語形の推移のことも考えさせる。『方言文法全国地図　2』の一段動詞命令形を見てみると、西日本にはヨ語尾域があり、その近くにイ語尾域もある(イ語尾は起キー・受ケーのように語幹と融合している)。一方東日本と九州の肥筑域とにはロ語尾域があり、その近くにレ語尾域がある。九州の状況で言えば、このレ語尾域にリ語尾が成立している。すなわち、ロ―レ―リと推移していく状況がここに見られる。

リ(ー)語尾命令形はさまざまの考察を待っているようである。